



フィンランド式 サウナ外交

(2010年5月 国際サウナ会議にて)



フィンランド外務省事務次官
ペルティ・トルスティラ

サウナ外交はフィンランドの伝統

人口530万人のフィンランドにはおよそ300万のサウナがあり、車よりサウナが多い国であるということをご存知でしょうか？ 実際には、どの家庭にもサウナがあり、ワンルームマンションにさえ小さなサウナをつけるのが普通なのです。また多くのフィンランドの会社社屋及び官庁、各省、市役所、学校や病院等の公共建築物にはサウナがあります。

フィンランド人はどこに行こうとも、サウナを持ち歩きます。世界中の98のフィンランド外交領事館すべてに、自前のサウナがあります。ここ東京にも2つのサウナがあり、大使館サウナは日本で建てられされた最初のフィンランドサウナです。

2010年3月のワシントンポストの記事には「ワシントンD.C.のフィンランド大使館のサウナ倶楽部は、ワシントンに動かしている150人もの有能な人物をメンバーとしている。彼らはサウナでリフレッシュしながら、最新のD.C.ニュースやホットなスクープを交換し合う。連邦議会議事堂スタッフ、公共政策通、ロビイスト、当局者やリポーターは、しきりに彼らの情報を欲しがっている」とあります。これは事実で、同様の「サウナ倶楽部」は、他のフィンランド大使館にも存在します。

フィンランドではサウナは外交の場としても利用されます。熱いサウナの中で国内的論争のみならず国際的論争を解決する“サウナ外交”はフィンランドの外

交官に何十年もの間教え伝えられているお家芸なのです。それでは皆さま、サウナ外交の世界にようこそ！

平和維持活動最前線にサウナあり

フィンランドは、国際的な平和維持活動に50年以上参加し、国際的平和維持に最も寄与している国の一つです。5万人以上のフィンランド人が、エジプト、レバノン、キプロス、ボスニア、コソボ、ナミビア、カシミール、アフガニスタン、リベリア、チャド等においてさまざまな任務に参加しています。彼らは戦争で破壊された地方に平和をもたらすことに貢献しながら、地元の人々や他の平和維持軍にフィンランドのサウナ文化を紹介しています。

兵士が外国の地にキャンプを設営するために到着すると、最優先事項として最初にサウナを造ります。フィンランド隊はこれまで様々な国において、その時の事情に合わせたサウナを設営してきました。

1950年代のシナイ砂漠でのUNEF活動のフィンランドの派遣団は、サウナを収容する35の小屋を建設しました。イスラエル人とエジプト人は、「本当にこんな暑いところでサウナですか？ フィンランド人はオカシイ！」と仰天しました。

私は1966年～1967年の間、キプロスの国連軍の予備大尉として勤めました。私の小隊にはサウナがあり、近隣の小隊にはサウナだけでなくプールまでありました。外から見るとブロック階段のさびれたガレージでしたが、サウナに入った後のプールは最高でした。キ





プロスの和平を交渉した時、対立する両国の代表はそのサウナを訪れたのです。

1980年代及び1990年代中に、ゴラン高原の国際連合レバノン暫定駐留軍では、フィンランド軍隊のみがサウナに入れるだけでなく、希望すれば、イスラエル及びシリアの大使もサウナの使用の機会があるよう配慮しました。

2000年初頭、コソボの治安維持部隊にフィンランドは800人の兵士を派遣しましたが、その兵士と外国のお客様のために20以上のサウナを彼らのベースに建設しました。事務官と兵士は、戦後のコソボのような緊張した環境下ではサウナがストレスの軽減に役立ち、重要な社会的役割を演ずることを知っていたのです。

アハティサーリ元大統領のサウナ外交

外交会議において、サウナは交渉の前進に大いに助けとなります。2008年のノーベル平和賞受賞者、マルティ・アハティサーリ氏はフィンランドの元大統領ですが、彼はアフリカからアジア、タンザニアからインドネシア等世界の多くの地域で、サウナ外交を成功裏に行いました。アハティサーリ氏は言っています。「どのように両者が遠く隔たっていても、重要なことは、ただただ会って、話す、会って、話すこと」。サウナはその点で素晴らしい環境を提供します。

1973年～1977年の間、タンザニアのフィンランド大使として勤めた時には、後にタンザニアの首相となったジョン・マルセラ外相は大使のサウナの常連客でした。「何故こんな暑いアフリカでサウナに入るのか」



と尋ねられた時、アハティサーリ氏は「あなたがサウナから出るとき、外の熱気が涼しく感じられるでしょ」と答えたそうです。

また氏は1977年～1981年の間、ナミビアのための国連コミッショナーとして勤めました。ナミビア人は「アハティサーリ氏は、ナミビアという“赤ちゃん”を出産させた助産婦だ」と言っています。19世紀の終わり頃、サウナは家の中で絶対に清潔なところであったので、多くのフィンランド人の赤ちゃんはサウナの中で生まれました。“ナミビア共和国の誕生”の場合にも、サウナは申し分なくその伝統的機能を果たしたのです。

人の心の“よろい”を溶かす

「私は一緒にサウナに入ろうと同僚を誘います。それから、私側の法案に同意するまで、彼らをサウナから出さないのです」。これはわが国のアレキサンダー・スタブ外相が、サウナは交渉のための最高の場所とし



て、著書に書いた一文です。冗談のようですが、こればフィンランドの政治家の伝統的技法のひとつです。25年以上にわたりフィンランド大統領を勤めたウルホ・ケッコネン氏は、サウナのメリットの確固たる信奉者でした。取引・交渉が煮詰まるまで、ケッコネン氏は客人を“蒸気”に任せると言われます。

冷戦中、東西間におけるフィンランドの中立性は、ソビエト連邦によって絶えず脅かされました。ケッコネン大統領は世界的リーダーや官公吏を彼のプライベートサウナにどれほど招待したかわかりません。正式な議論は通常の交渉テーブルから始まって、サウナ会議へと続き、大きな問題はサウナで交渉されました。

サウナの中では人はすべて平等

サウナに入ると友好の気持ちが生まれ、心のよろいが溶けるのでしょうか。サウナの中では超大国も小国も上司も使用人もなく、人はすべて同等なので、問題が解決しやすいのです。そして裸にいるときに何かに同意したなら、人はその後もその約束を守り続けます。



契約や調印よりも裸のつながりほど強いものはありません。

これらは私たちフィンランド外交官の“秘伝”ですが、サウナ効果は何もフィンランド人に限ったことはありません。サウナが熱くなっていればどこでも、サウナは交渉の後押しをしてくれます。日本のみなさまもお試しになってはいかがでしょうか。